

# エンカウンター（ENCOUNTER）

## 第 57 号

平成 19 年 1 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

### 神谷美恵子著作集 第 2 巻「人間を見つめて」( 3 )

#### 知性について ( 1 )

自分でえらび、自分で決定するには責任が伴う。不安や、場合によっては苦痛や不幸に耐えなくてはならないこともある。ともかく、勇気の要ることだ。

であるから選ばないで済むほうが、ある意味ではらかなのだが、哲学者がいうように人間はいわば選択を強いられている。仕事にせよ、結婚の相手にせよ、生活のしかたにせよ、何かをえらぶ場合にもっとも必要なのは、何がたいせつで、何が二義的か、の価値基準であろう。人生において、あれも欲しいこれも欲しいといって駄々をこねるような人に時どき出会う。また、自分の中にもそういう心がひそんでいるのに気づくことがあるが、それでは欲がふかすぎるというものであろう。たいせつと思われることが一つでも二つでも与えられれば、あとは何とか工夫して欠乏に耐えて行くほかはあまりない。

人生にはただ慣習に従っておけばよい面と、どうしてもこれだけはゆずれない、ゆずってはならない、という本質的な面とがある。

## 知性について（２）

考える力を養うにはどうしたらいいか。第１には現実への密着から時どき脱出を試みることだと思う。旅するのもよいが、それよりも一層たいせつなのは日常の生活の中での心理的脱出方法を身につけることだろう。そのためには実利実益のみを求めぬこと。これによって対象への隔たりができる。そこから客観性やゆとりやユーモアが生れる。こうしたものはみな、考える内容をゆたかにするための条件ではなからうか。第２には黙想と自己との対話を欠かさないこと。読書や講演をきくのもいいが、その際絶えず疑問を起し、たえずまず自分にむかって問いを発していないと、何を読んでも何を聞いても、脳の中のあちこちの神経細胞の間に、烈しくインパルス(刺激)がとびかうことがないから、脳内に痕跡(あと)を残さず、するとあたまを素通りしてしまうおそれがある。...

新しい課題というものは個人の人生にも、人類の生活にも、たえずあらわれてくるものだ。とくに現代の私たちの前におかれている課題は、人類の有史以来初めてという世界的規模のものが多い。その意味で私たちの知性はぎりぎりまで試(た)められている。...

どうしたらこの悲劇を避け、地球上で人類が平和共存して行くことができるだろうか。このことのためにできるかぎりの考える力をふりしぼりたいものである。知性とは人間の情意をも、知能をも道具として、高い目標のために、うまく使いこなして行く力であると思う。したがってこれは人間の脳全体、存在全体を動員するはたらきであるにちがいない。

## こころのいのち

病気や肢体不自由になやむ人は世に多い。からだが病気になると人間はたちまち意気そそうし、生きて行くことへの自信や意欲をうしなうものだ。それは生命力そのものへの浸襲だから、あたりまえのことであろう。病人がどれほど心細い思いをするものか、健康な人にはわからない。医師も看護婦も、一度は病気　それもあまり簡単でない病気にかかってみた人のほうが、患者の心を思いやることができるとよいとさえ思う。あまりにも丈夫な人というものは、弱者の立場に立ったことがないために、自分はそうと意識しないで病気の人を傷つけたり、冷酷であったりすることがあるのではなからうか。自分でも病みうる存在である事に気づかないのではなからうか。

これが心の病ともなれば、思いやることはなお一層むづかしい。精神病の人が、世にも奇怪な幻覚や妄想におびえるとき、彼がどんなに恐ろしい思いをしているのか、私たちには想像もできない。眼をすえて戦慄している人や、目の前に泣伏す人に対して、十分にその人の気持ちになってみる事ができないのが精神科医の悩みである。...

## 自発性と主体性について（１）

愛生園の看護婦さんの中には通信高校講座をとっている人がかなりいる。あの烈しい勤務のあい間に、よくもできることだ、といつも感心する。三交代の勤務体制だから、放送の時にいつも聞いているわけではない。その時間に休みの人が放送をテープに録音しておく、というかたちで助け合っているのである。こういう努力を何年も持続して行くのは、なみたいていの事ではないが、これを行っている人たちの顔には、勤務しているときでも、いきいきとしたはりがあるのに気づく。彼女たちがひまな時間をもてあましたり、「つぶし」たりする必要がないからだろう。自分から何かやろうという気持ち、つまり自発性という点では、右の高校生や看護婦さんのほうが、多くの大学生よりも、ずっとすぐれているのではなかろうか。どういう制度や教えかたが、もっとも若い人の自発性を誘い出すか。これを探求することが現代の教育に課せられた大きな課題だと思う。

主体性ということについても、考えるべき点が多い。ふつう、若い人たちは学生時代に主体性について大いに論じるが、いったん卒業してしまうと何と「非主体的」になってしまうことだろう。ところが主体的にも、責任をもって生きるべき人生は、まさに卒業後に始まるのだ。在学中はひどく張り切って、進歩的な意見を口にしていた人が、卒業後、ひどくはりを失ってしまうことが、特に女性に多いように思う。...

男女を問わず人間に求められているのは自分がいま、どんな時代と社会に生れあわせているのかという認識と、男または女に生まれついたことへの覚悟であろう。どっちみち、制約は避けられない。めいめいが置かれた立場で、制約の網の目をくぐりながら、できるかぎり「主体的に」生きて行くほかはない。それは試行錯誤をくりかえすことにほかならないであろうが、自分がほんとうに生きるべき道を、だれが初めから一挙に予見できるであろう。一生の間、道を求めて歩きつづけるのが人間というものであろう。

## 自発性と主体性について（２）

一生のあいだ、主体性をもって生きたいならば、ひとりである時間を上手に「主体的に」使う方法を、若い時から身につけておくこともたいせつだと思う。病気や特殊な境遇や老年など、人間が孤独を強いられるときも少なくないはずである。この頃のひとはグループ活動はうまくなったが、一人でいる時間を充実する術（すべ）はどうであろうか。人間の精神というものは、少なくともある範囲内では、孤独や暇な時間を生きいきとした内容で、ぎっしりとつまったものにする事ができるはずである。

たとえば、家庭の人でももし読書の習慣が身につけていたならば、いながらにして心は世界を駆けめぐることができる。精神の成長をつづけることができる。小さな「現実」にがんじがらめにならないでも済む。そのためには、学生時代のように、行きあたりばったりの乱読よりも、むしろ何かの題目についての系統だった読書のつみかさねがよいだろう。そうすれば、もっと暇と自由ができたときに、それが何かのかたちでプロの道へと通じることだって、あるかも知れない。また、たとえ家事や育児の合間でも、ものを書きためること、何かをつくることなど、何でもいいから、他人の存在やテレビばかりにたよらずに、自分ひとりでもゆたかな時間が持てるようになれば、それだけでもある程度まで環境から独立できるのではないだろうか。これは女性だけの問題ではない。すべて人間は根本的に孤独であることを思えば、孤独や余暇にプラスの意味を与えるかマイナスの意味を与えるかは、あらゆる人間の対処すべき根本問題であると思う。

主体的に生きる、ということはしかし、ただ気ままに生きるということではない。たとえば、自ら進んで身を挺して何かに仕えることなどは主体的な行動のうちでも、もっとも主体的なものだといえる。いずれにせよ、主体性と自由には、常に責任と何がしかの冒険が伴う。しかし、あえて責任を負い、冒険にのりだすことこそ、新鮮な生きるよろこびを約束してくれるのではなからうか。

## 欲望について 何が大切か

どのような方面のことやものについても、簡単に手に入ってしまうような所有物は、永続的なよろこびを人間に与えることはないであろう。たえず新しい発展や成長を約束するもの、たえずこちらの生命をしばり出さなければならないようなものをこそ、人生目標とすべきなのだろう。英語でいうチャレンジング、つまりこちらにたえず挑戦してくるようなものが、かえってこちらの力を引き出してくれる。苦勞を伴っても、新鮮なおどろきやよろこびを約束してくれる。そういうものがないと、おそらく人間は退化して行くだろう。せっかく発達してきた脳も、あまり使う必要がなくなると発達を停止してしまうのではなからうか。

宇宙の愛を自分にひきつけ

未来の叫び声に耳を澄ます

というパステルナークのことばをかみしめたい。

## 生存競争について

「経済大国」になっても、その国に住む人や、もっと貧しい国の人びとが、病苦や労苦や生活苦に悩んでいるのを放っておくようでは、いばっても何になろう。弱者の生命をたいせつにすることは、適者生存の法則を破ることであるかも知れない。しかし人間はもうこの辺で、「単なる生物」の域を脱して、精神的存在としての独創性と知恵とをはたらかすべきではなからうか。生存競争の勝利者となった者にこそ、この責任が重く課せられていると思われてならない。

## 使命感について（１）

生きがいを感じる心を分析してみると、そこにはいろいろな要素がふくまれていることがわかる。それをみな集めて煮つめてみたら、使命感という形をとるのではないかと私は以前に書いたことがある。その後、さらに考えていくと、多少の留保を加える必要は感じるが、大すじからいえば、この考えに変わりはない。...

愛生園の患者さんたちは、気の毒な病気にかかったとはいえ、よい薬の発見により、大部分の人がよくなっており、この病気そのものの苦痛に悩む人の割合はずっと少なくなっている。その上国家の手で一応衣食住と医療とを保障されているから、ただ生きるだけのことならば、一応心配のない状況にある。彼らの中には生きがいを感じられないで悩む人がかなりあるが、そういう人でも、能力の許す範囲内で、しごとや趣味など、「何かすること」に打ちこみ出すと、きれいに治ることが多い。園内には、安いとはいえ賃金をもらってする諸作業のしくみもあるが、それとはべつに、何も報酬ももらわずに自分から仕事を買ってでるひともある。たとえば長い間、精薄者の親代りになって愛護の労をつづける人。海岸ぞいの道を一年中毎朝清掃する人。雨の日も風の日も、丘の上の「恵みの鐘」を朝夕きっかり６時についてきた人。こういう人たちは十年一日のごとく黙々と自分で自分に課した役割を果している。それが皆をよるこばしているということはいうまでもないが、何しろ毎日のことであるから、もうみんなあたりまえみたいな気になって、一々ねぎらいのことばを言いに行くわけでもないし、本人たちもべつにみとめられることを目的にしているのではないから、まったくあたりまえな様子でやっている。

こういう人たちの目立たない尊い存在をながめていると、そこには無言の使命感のようなものが働いているのではないかと思われない。ともかくこういう人たちはノイローゼには決してならないので、精神科の診療室でお目にかかることはない。



## 使命感について（２）

けっきょく、使命感に生きる人の注意すべきことは、つねに謙虚な反省を忘れないこと。自分と自分の使命感とをいつも少し遠くへつきはなして見るゆとりとユーモアのセンスをもつこと。およびたえずあらたに道を求める祈りの姿勢であろう。

使命感に生きた人としてよく例にあげられるのはシュヴァイツァーである。日本では宮沢賢治の宗教的使命感がよく知られている。女性にも決して少なくなく、ナイチンゲールやジャンヌ・ダークなどあまりにも有名である。フランスのいなかの娘が天使の声によって救国の使命をさずけられ、軍隊をひきいて、イギリス軍の手からフランスを解放し、ついには使命に殉じたという。故新渡戸稲造先生は、ジャンヌ・ダークに傾倒しておられ、その書斎にはジャンヌ・ダークの像が大小いくつもあったのを幼な心におぼえている。この若いおとめが使命に殉じたという。その「無償性」に先生は何よりも感動しておられたらしい。さいきん注目されているフランスの女流哲学者シモーヌ・ヴェーユも使命感の人といえよう。...

以上の例から見ても、使命感のもつ作用がわかる。これは何よりも、人の生をある目標にむかって強く統一する。使命感を持つ人は気を散らさず、こつこつと、根気よく歩いて行く。途中で障害や困難があっても、何とか乗越えていく。それは、いわば捨身で自分の生命を自分一個より大きな目標のためにささげているからである。

ささげる、というと、いかにも気負ってきこえる。たしかに使命感に生きる人は、みな努力家の一面を持っているであろう。しかし、べつの面では、ただ「そうせざるにいられないからやる」という「やむにやまれぬ」という必然性、すなわち自然さをそなえているはずである。必ずしも利益や結果を期待してのことでない「無償性」をそなえているはずである。

### 使命感について（３）

これは使命感というものが、本来それをいただく人の性格や本性そのものからの発露であるからであろう。どのような立派な使命感でも、他人からの借りものではぴったりせず、無理があり、長つづきがしない。人間はただ背のびをしていては、苦しくなるばかりである。したがって、どのようにめざましいかたちをしていようとも、使命感は、それをもつ人にとってはごく自然なあたりまえのこと、さりげない事であるはずと思われる。

このことを私は、故光田健輔先生に親しく接して強く感じた。先生の一生は文字どおりらいの医学的研究と、らい患者の救済と、この二つの使命にささげつくされたものであったが、先生は肩をいからせて気ばっている、というようなところが少しもなかった。どこか、ひょうきんで、苦しいしごとの中に、たのしみをみいだしておられるふうがあった。

使命感というほど大げさなことでなくとも、私たちは、自分は何をなすべきか、ということで悩み迷うことがある。とりわけ青年時代に、この悩みの中で何年も過すひともあろう。

しかし、いろいろな伝記を読んでも、必ずしも多くの人に早くから「なすべきこと」が自覚されているわけでもないことがわかる。人生は思いがけない出会いやことのはずみに満ちみちている。そういうものが次第に人の歩みのある方向へ導いて、打ちこむことがみつかるとある人もある。

けっきょく、私たちにできることは、何かよび声がきこえたときに、それにすぐ応じることができるように、耳をすましながら、自分を用意して行くことだけだろう。そういう人のところに、遅かれ早かれ使命が、何かのかたちをとって、現れてくる。前国連事務総長の故ハマーショルドはいう。

「使命のほうがわれわれを探しているのであって、われわれのほう和使命を探しているのではない。」（『道しるべ』みすず書房、1967年）

「ハリール・ジブラーンの詩」より（１）（角川文庫）

## 子どもについて

ハリール・ジブラーン（注）

神谷美恵子訳

赤ん坊を抱いたひとりの女が言った。  
どうぞ子どもたちの話をして下さい。  
それで彼は言った。  
あなたがたの子どもたちは  
あなたがたのものではない。  
彼らは生命そのものの  
あこがれの息子や娘である。  
彼らはあなたがたを通して生まれてくるけれども  
あなたがたから生じたものではない、  
彼らはあなたがたと共にあるけれども  
あなたがたの所有物ではない。

あなたがたは彼らに愛情を与えうるが、  
あなたがたの考えを与えることはできない、  
なぜなら彼らは自分自身の考えをもっているから。  
あなたがたは彼らのからだを宿すことはできるが  
彼らの魂を宿すことはできない、  
なぜなら彼らの魂は明日の家に住んでおり、  
あなたがたはその家を夢にさえ訪れられないから。  
あなたがたは彼らのようになろうと努めうるが、  
彼らに自分のようにならせようとしてはならない。  
なぜなら生命（いのち）はうしろへ退くことはなく  
いつまでも昨日のところに  
うろうろ ぐずぐず してはいないのだ。

あなたがたは弓のようなもの、  
その弓からあなたがたの子どもたちは  
生きた矢のように射られて 前へ放たれる。  
射る者は永遠の道の上に的(まと)をみさだめて  
力いっぱいあなたがたの身をしなわせ  
その矢が速く遠くとび行くように力をつくす。  
射る者の手によって  
身をしなわせられるのをよろこびなさい。  
射る者はとび行く矢を愛するのと同じように  
じっとしている弓をも愛しているのだから。

(神谷美恵子先生の説明)

この詩はほとんど説明を必要としないものでしょうが、すべて親たるもの、とくに母親たるものの心に強く訴えるところがあるので、すでに他で紹介したことがあるのですが、ここに再録しました。

(注)ハリール・ジブラーン(1883 - 1931)

レバノンに生れた詩人。その詩は、アラブ諸国、アメリカ、ヨーロッパ、南米、中国にまで親しまれている。祖国を愛しながら、欧米で暮らした。12歳のときアメリカのボストンに居住、15歳の頃レバノンのカトリックの学校に入る。29歳からアメリカに永住、35歳から3年間パリに行き、ロダンのもとで学んだ。ニューヨークで48歳で亡くなった。主著『預言者』。神谷美恵子先生は、この本を美智子妃殿下よりプレゼントされ、ジブラーンに親しむようになり、おもな詩を翻訳紹介された。

「ハリール・ジブラーンの詩」(神谷美恵子訳)は角川文庫に収められている。